

「東海道線高架鉄道用地図」に関する考察

鉄道総合技術研究所 フェロー会員 ○小野田 滋
 鉄道総合技術研究所 正会員 野末 道子

1. はじめに

土木学会では、2005（平成 17）年に土木図書館委員会に図面資料研究小委員会を設置して、各所に保存されている土木図面のデジタル化を推進してきた。その成果は、土木図書館デジタルアーカイブス（図面資料アーカイブス）としてホームページを通じて一般にも公開され、多くの方々に利用していただいている。

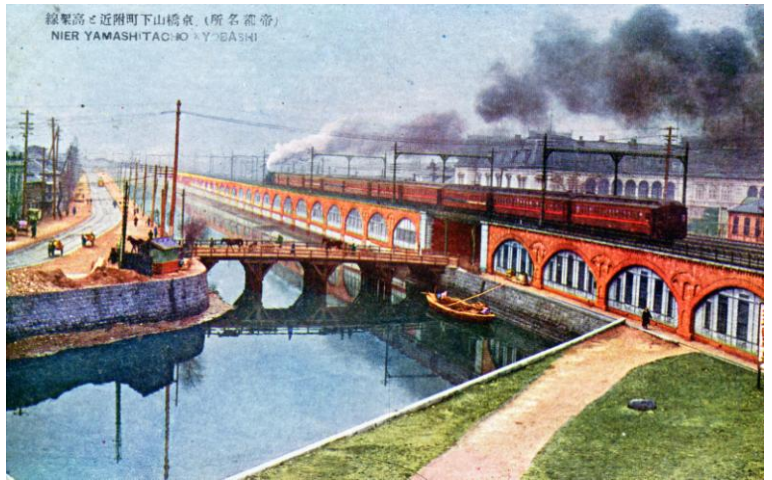
ここでは、これまでデジタル化した資料のうち、「東海道線高架鉄道用地図」について紹介してみたい。

2. 新永間市街線（東海道線高架鉄道）

「東海道線高架鉄道」は新永間市街線の名称で建設された東京の新銭座と永楽町を結ぶ高架鉄道のことで、1900（明治 33）年に基礎工事に着手して、1910（明治 43）年に延長約 2.7km（工事区間延長は約 4.0km）の複々線（電車線×2線と汽車線×2線）の高架鉄道が完成し、1914（大正 3）年にはその終端に中央停車場として東京駅が開業した。この鉄道は、すでに市街化していた東京の中心部を貫通して建設されたため、全線を高架線として路面交通との立体交差化を図ることとなり、用地買収を行って建設が進められた。高架橋の設計は、ベルリンの高架鉄道をモデルとし、1898（明治 31）年にドイツからフランス・バルツァーを顧問技師に招聘して具体案が進められ、煉瓦造の連続アーチ高架橋を基本として道路との交差部にバックルプレート付きの鉄桁を用いた。

3. 特徴

今回デジタル化した用地図は、「東海道線高架鉄道自芝区源助町至麹町区永楽町間用地図」と記された縦 783mm×横 5266mm の図面で、現在の新橋駅の南端付近から東京駅の北端までが 600 分の 1 縮尺で描かれており、作成年や作成機関（担当者）などの記載は無い。工事前の平面図に重ねて、朱書きで高架橋の中心線や用地境界などが図示され、一部に「大正四年度交換払除」「東保未第四三八号ノ七管理換・昭和六



▲写真1 外濠と新永間市街高架線（山下橋付近）



▲写真2 「東海道線高架鉄道用地図」の様態

キーワード：高架鉄道，土木史，用地図，資料保存

連絡先 〒185-8540 東京都国分寺市光町 2-8-38 （公財）鉄道総合技術研究所 TEL 042-573-7252

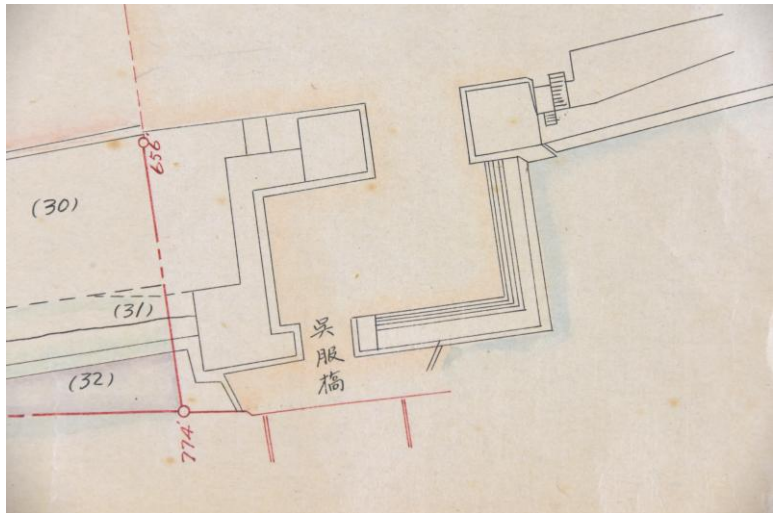
三. 三一」などの加筆がある。これらの記載事項や年号が、当初の用地図に加筆・追記したものか、昭和になってから新たに描かれた用地図なのかは判然としない。なお、鉄道の料程は市街線分岐（新橋起点 40 鎖）からの料程で示されており、東京起点となっていない。

また、この用地図の下地として描かれている地図には、明治時代以降も残存していた江戸城の見附のうち、東京～新橋間に存在した呉服橋御門、鍛冶橋御門、山下橋御門、幸橋御門の跡地が確認され、道路や用地の区画も工事前の状況を示しており、これに重ねて朱書きで高架橋の中心線や用地境界などが図示されていることから、工事前と工事後の用地境界を明かし、未整理の用地についてさらに追記してその整理状況を図示した用地図である可能性が高い。ちなみに、完成後の高架線の工事記録（文献 1）によれば、高架鉄道用地は 1899（明治 32）年末から買収に着手したが、一部の協議不調の土地については土地収用審査会の裁決を求めたほか、1911（明治 44）年度以降も未払土地、建物移転費などが計上されている。

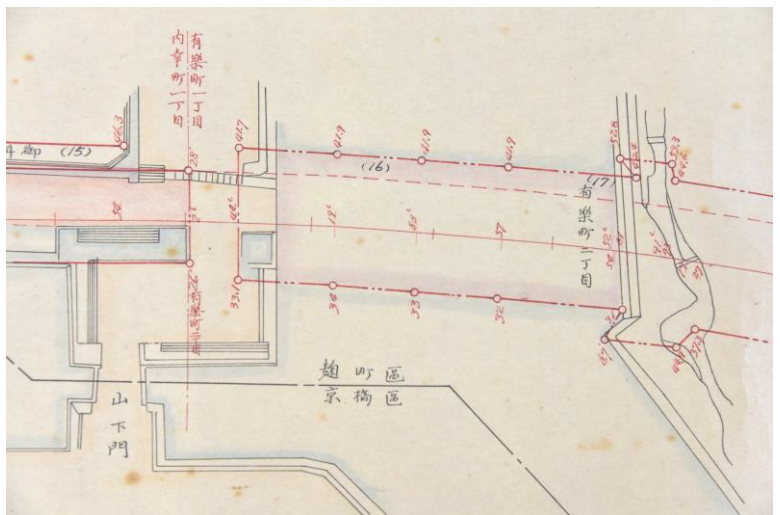
4. まとめ

今回デジタル化した用地図は、タイトルに建設時の線路名称である「新永間市街線」ではなく「東海道線高架鉄道」を用いている点から判断しても、建設時に作成された図面ではなく新永間市街線の完成後に作成された図面である可能性が高い。おそらく、市街線の完成後も未整理の用地がいくつか残存し、昭和時代の初期まで換地などの整理が進められていたことが推察され、工事着工前（用地買収前）の用地図に、現状を重ねた図と判断される。また、工事着工前の土地利用状況や区画を知ることのできる歴史資料としても貴重である。なお本研究は、JSPS 科研費（平成 27 年度／課題番号 15HP8032）の助成により、土木学会土木図書館委員会図面資料研究小委員会が実施した。

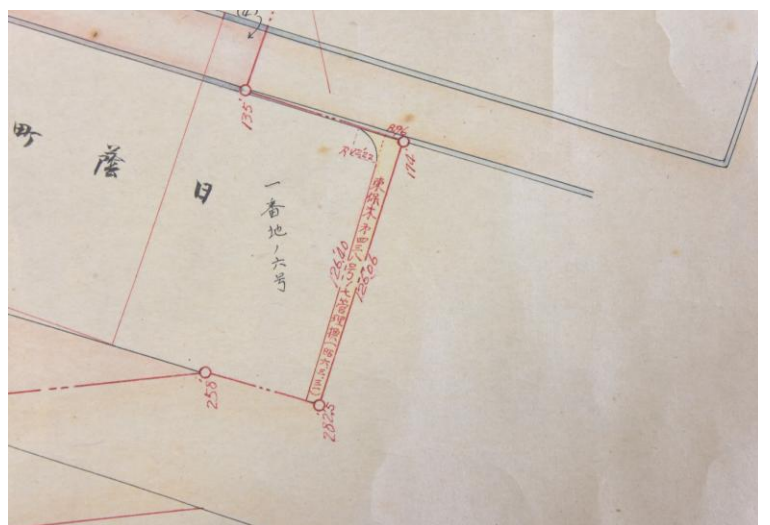
＜参考文献＞ 1) 『東京市街高架鉄道建築概要』鉄道院東京改良事務所（1914）



▲写真3 呉服橋御門付近（拡大）



▲写真4 山下御門付近の高架鉄道用地（拡大）



▲写真5 管理換の追記部分（拡大）